

インタビュー当日、町田研究室にて。  
(撮影：高松洋一)



インタビュー

## すべての道は辞書に通じる

### インド系文字の印刷から辞典編纂まで

**町田和彦**

まちだ かずひこ / 東京外国語大学名誉教授、元AA研

聞き手——星泉・高松洋一（ともにAA研）

構成——星泉

『ヒンディー語・日本語辞典』（三省堂、2016年）を刊行した町田和彦さんに、辞書プロジェクトのはじまる遙か前の段階である「印刷」という大問題への取り組みから、辞書の完成に至るまでの様々な仕事について、2017年3月某日、退職直前のお忙しい中、研究室でお話を伺いました。

#### ◆最初はタイプライターだった

——定年退職を目前に控えて、これまでの研究の集大成とも言うべき辞書が出版されました。おめでとうございます。町田さんの辞書以外にも、カンナダ語、パンジャービー語、シンハラ語という3言語の辞書が同じ三省堂からシリーズで出ましたよね。いずれも大変な労作です。(写真1)

**町田** 2001年から5年間にわたって行われた「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(GICAS、ガイカス)という大型プロジェクトがあって、その中の一つに南アジアの言語の辞書を作る研究班がありました。その成果がようやく日の目を見たわけです。三省堂の編集者の柳百合さんには最初から参加してもらいました。

——辞書作りはただでさえ大変だと思いますが、南アジアの言語の辞書となると、インド系文字の問題もありますし、随分苦労されたのではないのでしょうか？

**町田** 話せば長い物語になりますが、一番の難しさというのはいわゆるアウトプットの印刷の部分でした。1994年にAA研に移る前は(東京外国語大学の)外国語学部のヒンディー語教師でした。そこで教科書を作る立場になって、デーヴァナーガリー文字の活字が利用できなくて、困りました。

——パソコンのない時代ですよ。

**町田** そう。タイプライターの時代です。タイプライターも結局特注ですよ。当時私の研究室には世界に一台しかないタイプライターもありました。発音表記用のタイプライター、和文タイプライター、ヒンディー語を書き表すデーヴァナーガリー文字のタイプライター2種を使って作った教科書がこの『ヒンディー語の基礎』です。(写真2)

——きれいな印刷ですね。何年の本ですか？

**町田** 1983年です。私はこれが本当のデスクトップ・パブリッシングだと思っていたのだけれども(笑) 渋谷の東急ハンズに行ってカッターマットやら接着剤、ピンセット、ゴミを取るためのラバークリーナー、通称「ハナクソ取り」という道具やら、必要な道具をみんな買い込んでくるの。上司だった田中敏雄先生と2ヶ月ほどかけて研究室で切り貼りをしました。

——日本語とヒンディー語が混在した文章をタイプライターと切り貼りで作るのはかなり大変そうですね。

**町田** 難しいですよ。次の文章が日本語だとして、その前にヒンディー語を入れる場合、間隔を細かく計算して打つわけです。駄目だったら打ち直しです。貼る段になったらピンセットを使って計算した通りに貼っていきます。

——デーヴァナーガリー文字のタイプライターは、AA研で2015年にあった「アジア諸文字のタイプライター」展で展示されていたあれですよ。(写真3)

**町田** そうです。実はあのタイプライターは、AA研が特注で作ったチベット文字タイプライターをもとに作られたものなんです。和文タイプライターを改造した特注品で。

——なるほど、そういう経緯があったんですね。デーヴァナーガリー文字のタイプライターなのに、チベット文字で「チベット文字タイプライター」と書いたシールが貼ってありましたものね。

**町田** 今から考えてみると、これが僕の初めてのAA研との出会い。噂を聞いて、すぐに業者を紹介してもらって、お願いしますといって作ってもらったんです。当時、何十万もしましたよ。学内で予算申請して買ってもらってね。

——それが1983年のことだったんですね。

◀写真1 2016年8月に三省堂から刊行された『ヒンディー語・日本語辞典』。



写真2 タイプライターを使って作った教科書『ヒンディー語の基礎』(1983年)。

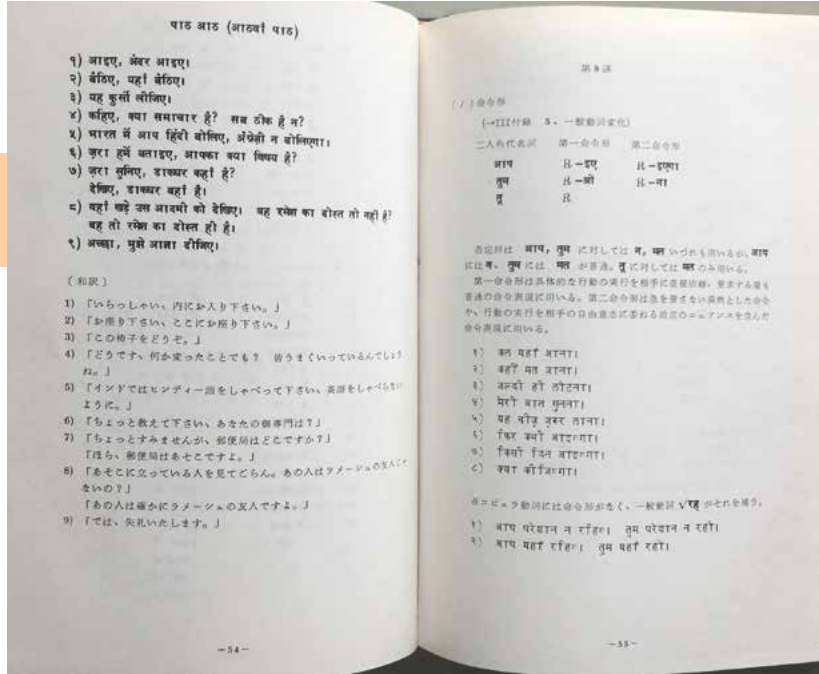


写真3 世界に一台しかない特注のデーヴァナーガリー文字タイプライター。本誌16号掲載の『アジア諸文字のタイプライター』展を巡って(荒川慎太郎)もあわせてお読みください。(撮影:澤田英夫)

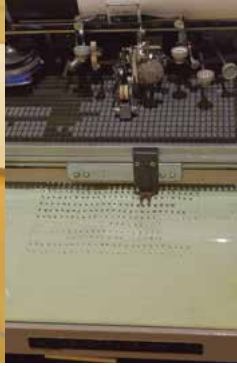


写真4 ドットプリンターで作ったヒンディー語の研究用資料(1989年)。フォントも手作り。

1 म-द्वारा विद्य स्वल्प वी हुई उनके नाम की  
2 ने मुख्य रखावले की आजा वी कि वह जकर  
3 न छोड़ कर भागीरथी दस सुग्रीव विभीषण  
4 नृमान की प्रथम खदन लौटते हुए वेक कर  
5 झड़ी लगा दी और हनुमान, सुग्रीव तथा  
6 अजा वी कि अंग को पकड़ कर बंध ले किन्तु  
7 रवेरी की खोज के लिए भेजा। चौथी दुकड़ी की  
8 अ पश्चात्तम हुआ और अंत में अपने प्रिय पुत्र  
9 इ से युद्ध करने भेजा किन्तु ये हनुमान और  
10 ई सेना का संचालक नल की, बलिदान का  
11 वण ने कृद्ध हो चार राक्षसों को आजा वी कि  
12 अही। आक्रमण पराम करने से पहले उन्होंने  
13 आजा और सुग्रीव को सिंहासन पर चिठाने और  
14 लिए चला। त्रिशित बहुर वीरता से लड़ा किन्तु  
15 रो की सेना में भगदड़ मच गई। सुग्रीव और  
16 की राजी नहीं हो तो तुम्हारा नाश निश्चित है।  
17 रणवियथि सुग्रीव को राक्षसिके हुआ और  
18 से सुग्रीव का भी वध कर देता। युवराज  
19 धृष्ण के पास बैठे थे। यह समाचार सुन कि  
20 उग्रण तथा वरुण आदि दान में दिए। सुग्रीव,  
21 और चलेने सम्य अनेक खल आमुष्ण तथा  
22 के समझने पर कि तुम अग्रध होता है उसे  
23 रा कि स्वल्प की हुई उनके नाम की अंकित  
24 ए कृद्ध हो कर का भी वध कर दिया। वह  
25 बंड कर हनुमान ने सारा सारा आदि से  
26 आ को पार कर राक्षस का की और मुझ और  
27 पने अवरण पर संयुक्त पश्चात्तम हुआ और  
28 अर्थ करने के लिए बहुत ही शपा-भला कहा।  
29 का समस्त सारा भी किलार से कृद्ध भुवनाय  
30 अक कर रोते रही और सुवर्ण सुग्रीव रही।  
31 उसने हनुमान का भार रोचना चाहा किन्तु  
32 उर लक्ष्मण का महकृष्ट युद्ध बरत कर हुआ।  
33 धारण बल-वीर्य का हनु भी शरणा हुआ कि  
34 फिर यह सोच कर उनके मन में संतोष हुआ कि  
35 किन्तु उन्होंने राक्षस की कोई बात नहीं सुनी।  
36 सेवा करनी ही स्त्री का सन्तान धर्म है।  
37 में ल पाया और किसी तरह हार नहीं आया  
38 व हूण। सब ही किस्किव्य-विशुद्ध हो रहे थे।  
39 ने समस्त घटाने संक्षेप में कृद्ध सुग्रीव और  
40 ए सीता को अपने आने का समाचार देता जाऊँ।  
अंकित अंगुठी सीता को वी। उसे वेध कर सीतु  
अंगद आदि को तुरंत यहाँ भेज दे। शीघ्र ही  
अंगद आदि ने लक्ष्मण सहित आगे बढ़कर इस  
अंगद आदि जानरी को विद्वान् हो गया कि वे का  
अंगद आदि सब बानर सरदारों और अंत में र  
अंगद उन्हें धक्का वे बाहर निकल आए और जो  
अंगद की अग्र्यक्षता में सुग्रीव ने बलिदान के ए  
अंगद की रक्षा का भार राम पर छोड़ वह  
अंगद के हाथों से मार पाए। तब प्रधान सेन  
अंगद को और परिवन्धु का हनुमान को निध  
अंगद को पकड़ कर बंध ले किन्तु अंगद उन्हें  
अंगद को बला कर कहा कि नेरी और से लका  
अंगद को युवराज बनाने का प्रबंध करो। अ  
अंगद ने उल्का वध कर दिया। राक्षस के पुत्र  
अंगद ने किसी तरह अपनी सेना को फिर से स  
अंगद ने राक्षस की सभा में जाकर राम का  
अंगद युवराज घोषित किए गए। राम को वर्ष  
अंगद से रुद्र लक्ष्मण के आने का समाचार प  
अंगद हनुमान आदि ऐसा कर रहे हैं उन्हें वि  
अंगद, हनुमान, विभीषण आदि की भी उचित  
अंगाराम आदि प्रधान किए। प्रतकाल होने पर  
अंगहीन करके छोड़ देने का आदेश अपने सेवक  
अंगुठी सीता को वी। उसे वेध कर सीता के म  
अंत तक बहुत अवरणला से लड़ना रहा। ए  
अंत तक किलार से सुवर्ण। अंत में सीता का  
अंत में अपनी राक्षसों में प्रवेश किया। सब  
अंत में अपने प्रिय पुत्र अंगद की रक्षा का स  
अंत में उन्होंने युवराजके अपना मन प्रकृष्ट  
अंत में उन्होंने राम-द्वारा कि स्वल्प वी है  
अंत में उन्होंने किस्किव्य-विशुद्ध इस पारपूर्ण  
अंत में उसे हार माननी पनी। आगे चल वे कि  
अंत में और कोई उग्रध न देव रावण ने एक व  
अंत में कहा कि सामुद्र युद्ध में उन्हें जीतना  
अंत में किसी तरह उन्होंने सीता को पा लिया। व  
अंत में कृद्ध हो रावण ने आजा वी कि सीता  
अंत में निरपराय हो कौशलराय ने कहेने पर पत्  
अंत में पकड़ने की आजा छोड़ राम ने एक तब  
अंत में परामर्श करके यह निश्चय हुआ कि तुर  
अंत में बलवाया कि किस्किव्य-विशुद्ध वर राम  
अंत में बहुत सोच-विचार कर उन्होंने वृष के उ

◆ドットプリンターからレーザープリンターへ

町田 そう。その次にそろそろパソコンが研究費でも買えるような値段になってきたわけです。当時ドットプリンターというのがあってね。ピンをインクリボンに叩きつけてプリントする方式で、すぐくうるさいんだけど、インド系文字の印刷にびったりなの。インド系文字というのは子音字があって、その子音字は単独だと母音のaを含んでいます。例えばデーヴァナーガリー文字でカキケコを書こうとすると、カは子音字だけを書けばよくて、キケコの場合はそれぞれの母音記号を子音字「カ」の上下左右につけて書くんです。若干の例外はあるにしても、インド系文字は基本的にみんなそういう仕組みです。つまり、同じ部品を組み合わせることによって音節文字ができるんですね。こうした特徴をうまく使って、インド系文字共通の仕組みをなんとかコンピューターでできないだろうかと思っただんです。

—それでドットプリンターを使ってやってみよう。

町田 そう。当時はフォントもなかったので、一からデザインして作りしました。1989年にドットプリンターを使って作ったのがこれです。中央にキーワードがあって、前後の文脈(コンテキスト)とともに出力した言語研究用の資料です。(写真4)

—当時これできたのは町田さんの研究室だけですか？

町田 おそらく世界で私の研究室だけでした。このドットプリンターを使って印刷したものを切り貼りして、版下を作ったのが、岡口典雄さんの『エキスプレス パンジャービー語』(白水社、1988年)です。ドットなのでグルムキー文字はあまりきれいではないけれど、ないよりはいいだろうということですね。(写真5)

—白水社のエキスプレスシリーズにはそんな裏話があったのですね。

町田 実はその頃、京セラからレーザープリンターが出たんです。すごくきれいに印刷できて、ドットプリンターの比ではないわけです。今から考えれば解像度はまだ不十分なんだけれども、当時としてはもう画期的。今度はレーザープリンターを制御すれば同じことができるのかな、ということで、制御するプログラムを自分で作ってやり始めたの。それで作ったのが丹羽京子さんと共著のこの『エキスプレス ベンガル語』(白水社、1990年)です。切り貼りではなく、日本語部分も含めてレーザープリンターで出力しました。(写真6)

—町田さんと田中先生の共著の『エキスプレス ヒンディー語』(白水社、1986年)もレーザープリンターですか？

町田 あれは世界でも珍しいデーヴァナーガリー文字の写植でした。—常にインド系文字の出版技術の先頭に立っておられたんですね。

町田 ずいぶんいろんな人の本を作るのを手伝いましたよ。20冊は超えるかな。私の恩師にラクシュミーダル・マールヴィーヤさんという作家がいるんですが、インドで出版された彼のヒンディー語小説も、僕の研究室のレーザープリンターで出力した版下を使っています。

—インド系文字に共通する仕組みはコンピューターとも相性が良かったようですね。

町田 実際のテキスト入力、エディターでローマ字と日本語で入力するだけです。ここは大きいデーヴァナーガリー文字でとか、ここは均等割付とか、決められたコマンドを入力するんです。有名な(ドナルド・)クヌース先生の作ったTeX(テフ)という多言語に対応した組版処理システムがありますけど、それを後から知って、「なんだ、同じじゃん」って思いました。大変おこがましいのだけどね。クヌース先生のほどではないけれど、印刷に必要なものはみんな作ってできるようにしてありました。

写真5 ドットプリンター時代に作った『エキスプレス バンジャービー語』(1988年)。

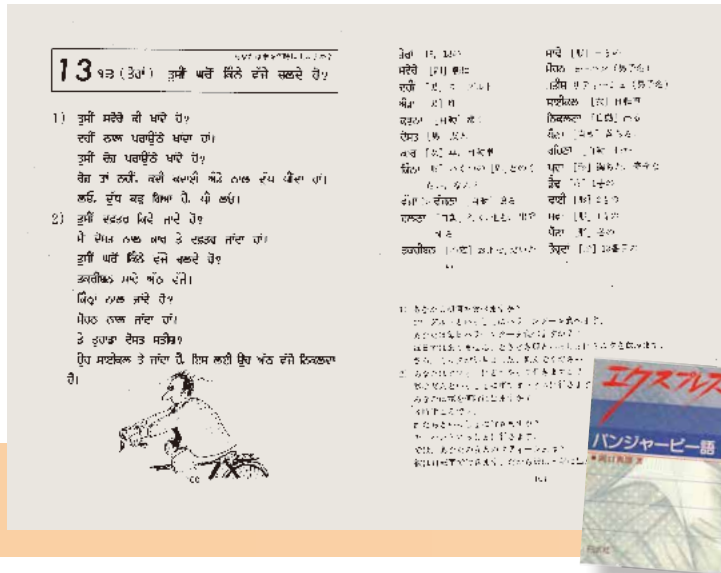
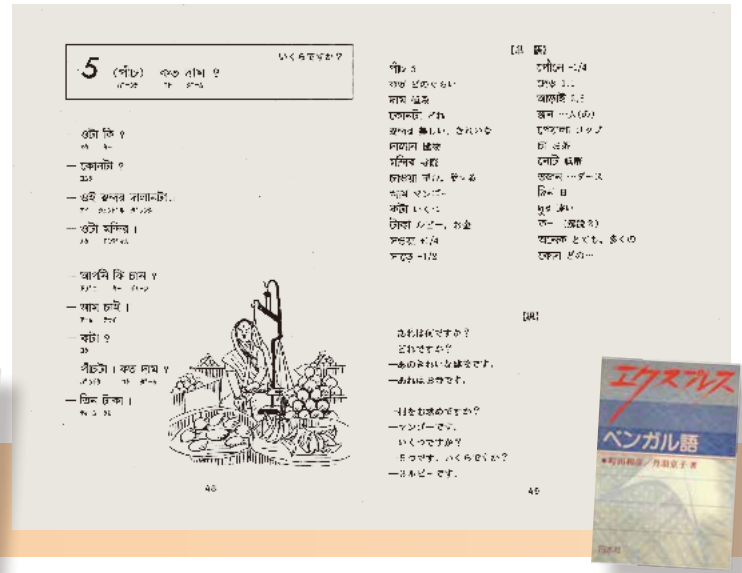


写真6 レーザープリンターで版下を作製した『エキスプレス ベンガル語』(1990年)。



### ◆いよいよ辞書作りの準備

—印刷が制御できるようになったら、いよいよ辞書作りになるのでしょうか。

町田 そう。辞書作りというのは、言語を学んだ人は誰でも一度は夢見るものだと思うのだけれども、大変なわけですね。どこから始めるか考えるだけでも。ヒンディー語というのは一応大言語なものですから、いい辞書はたくさんあるんです。でも、当然ながら不備もいろいろ目につく。私ならもっとこう直したい、というのがあつたわけ。

その中で、まず整備しなければならなかったのは、いわゆるデータベースです。ヒンディー語の良質な原文をできるだけ蓄積して、それを好きなときに好きな形で取り出すことができるような、そういうシステムを作らなければならなかったんです。

いい辞書を選んで翻訳する、というやり方も行われているわけですが、それでは作る本人としては面白くないなと思って、やはりオリジナリティを大事にしたかった。もちろん先達の辞書は大いに参考にはするけれども、やはり例文も自分で選びたい。ちょっと気が遠くなるような作業で、お金も時間も技術も必要だったわけなんだけれど、ちょうど先に触れたGICASという大型プロジェクトの申請が認められたの。それで辞書を作るぞと決意をして、データを集めるのにお金を使わせてもらおうと思ったわけ。

—GICASのプロジェクトが始まったのが2001年ですから、パソコンの技術も相当発展していますね。

町田 その頃の一番大きな変化というのは、Unicodeが一般化しはじめたということです。パソコンを買うとUnicodeに準拠したフォントが最初からバンドルされている時代になって。それを見たときに、僕が様々なプリンターと格闘してきたようなことはもう必要なくなったんだ。

でも、それまでやってきたことは徒勞でもなんでもなくて。というのも僕の持っていた大事な資産であるデータはそっくりそのままいいわけですから。僕のヒンディー語のデータは全てローマ字で書かれていて、ヒンディー語の前後には、ここから始まり、ここまででお終い、というタグが入っているの、そのタグの間の文字列をUnicodeに変換するプログラムを書けばいいだけになったんです。フォントはもうお任せすることができたわけ。テキストは好きなエディターで日本語とローマ字を使って書くだけ。

問題は出力の形式なんです、僕は出力をHTMLにしました。

### ◆MS-Wordで組版してしまう

—それはどういうことでしょうか？ HTMLというのはウェブサイトを表示

するのに使われている言語ですよ？

町田 そうです。ローマ字でヒンディー語が書かれていても一般の人は分からないですよ。エディターではローマ字で書くわけなんです、それをHTMLに出力するときにデーヴァナーガリー文字で出てくるように変換するんです。だからエディターで書いたもののチェックはウェブブラウザでします。手元のエディターで修正して、HTMLに変換して、ブラウザを再読込して確認する、その繰り返しです。もう十年以上この方式でやっています。

ブラウザに出てきたものをコピーしてMS-Word (以下「ワード」) に貼り付ければ、文字もきれいに出力されるんです。後はこっちの責任ではなくてワードの能力とプリンターの性能次第ということになって、僕はそういうものから全部解放されたわけ。

—町田さんがひとりで何から何までやっていた時代が終わったんですね。

町田 そう。中身に集中すればよくなったわけ。ここで問題なのは、HTMLをワードにコピーしたときに、いわゆるレイアウトというか、どの程度自動的にワードがやってくれるのかということね。つまり辞書だから、例えばフォントの種類や文字のサイズが違ったり、イタリックだったり、いろいろな属性がありますよね。そういう属性をちゃんとワードの方で継承してくれないと困るわけですよ。属性を継承した上で、さらに2段組みなどにするわけ。また、ページ番号を出力するとき、そのページの最初の単語が左肩に出て、終わりの単語が右肩に出るみたいな、辞書の書式があるでしょう？ そうした機能はワードが持っています。

だから、まず辞書のオリジナルのテキストを作りますよね。そして、それを変換してHTMLに吐き出して、それをブラウザで見る。見て、「うん、これでいいな」と思ったら全コピーしてワードに貼り付ける。だから、ワード上では文字入力などの編集はしないわけですよ。ワードはあくまでも整形出力のためだけに使うんです。

—それは普通の人が思いつかない発想ですよ。でも、HTMLからワードにするところでは随分苦労されたのでしょうか？

町田 とにかく辞書の最終出力をワードにしなければならぬので、ワードに属性を継承したまま貼り付けるのに一番相性がいいのは、やはりMicrosoftのインターネット・エクスプローラーというブラウザでした。

ですが、はっきり言ってワードというのは本当の組版ソフトではないわけですよ。だからごまかしながらやるんです。なんせ千ページを超えますから、なるべく手をかけないで済むように考えました。まずまずの見栄えで、なおかつなるべく自動で済ませるにはどうしたらいいか、小

写真7 辞典編纂に使っていたエディターの画面。  
シンプルだが構造化された記述方法だ。  
(撮影：高松洋一)

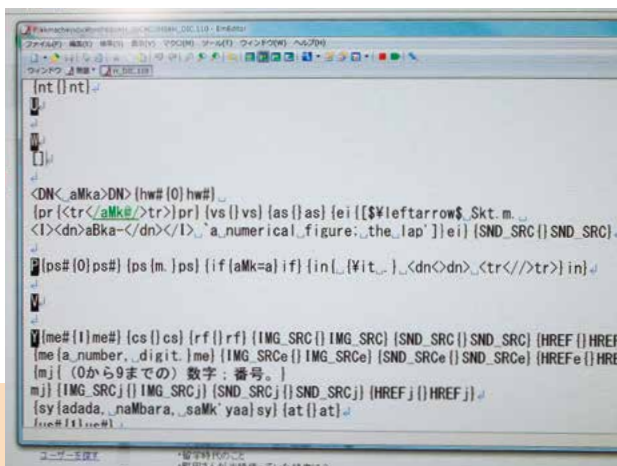
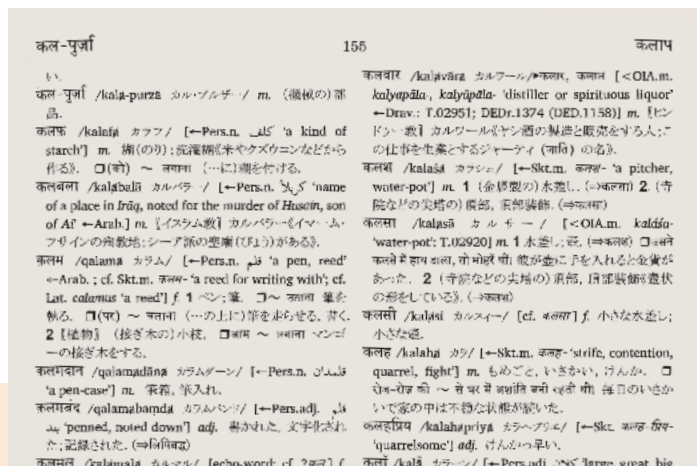


写真8 『ヒンディー語・日本語辞典』。「←」の後に語源情報がある。例えば、「ペン」を表す「カラム」という語がアラビア語からペルシャ語経由でヒンディー語に入ってきたことも分かるようになっている。



手先の技を使ったところもあります。

### ◆辞書は構造が大事

——辞書の語義を記述するにあたってはどんな工夫をされたんですか？

町田 僕の場合、まず各項目を記述するための構造を決めました。言語のタイプによって辞書の情報の持ち方が違うと思うんですよ。例えば、語形変化のある言語か、ない言語かによって必要な情報が違う。その記述の構造を決めたんです。一応ヒンディー語用ではあったんですが、ある程度汎用性も考えて作りました。汎用性があるということは無駄があってもいいということです。今使わなくても将来使うことになるかもしれないしね。(写真7)

——辞書にはカタカナで発音表記が記されていますが、ここにはないですね。

町田 あれば三省堂から締切近くになってつけてほしいと言われて、どうしたものかと考えて、綴りからカナの発音表記を自動生成するプログラムを作ったんですよ。

### ◆語源表記のこだわり

町田 僕がこだわったのは語源。ヒンディー語はペルシャ語、アラビア語、サンスクリット語、英語、ポルトガル語など、さまざまな大言語から借用しています。その情報をどう書くかという問題がありましてね。普通の辞書はペルシャ語でもローマ字転写で書いてしまうわけ。でもそれをやってしまうと、そのローマ字からペルシャ語の原語にたどり着くのが大変になってしまう。ローマ字で書かれたペルシャ語の本格的な辞書というのはないですから。もう一つ重要なのは、そもそもの時代の発音を書こうとしているのかということ。ヒンディー語に入ってきた

ペルシャ語は中世ペルシャ語であって、今のペルシャ語とは発音が違うんです。一方、文字は保守的ですから、ペルシャ文字で書けば昔も今もそう変わらない。だから、語源を明記するときには原語の表記をそのまま使うことにしました。(写真8)

——そういう辞書は他にないですね。開いてびっくりしたんです。ペルシャ文字を使ってきちんとペルシャ語として語源を示していたので。

### ◆例文の海を自ら作る

町田 例文をどうやって集めたかという話もしましょう。とにかくいい散文がほしかった。アジアの言語では意外と韻文が多いんですが、辞書の例文としてはあまり役に立たない。文体も特殊ですし。というわけで、近現代のヒンディー語の散文の名手と言われる人たちの作品をたくさん集めました。一番多く取ったのはプレームチャンドという有名な作家の作品からです。非常に多作ですし、1936年に亡くなっていて著作権も問題ないのでね。300近くにのぼる全作品を対象に、用例を検索できるシステムを作って、随分たくさん例文を集めました。

——インターネットから用例を取ったりはしなかったんですか？

町田 こういう時代ですからもちろんあるんですが、ネットに載っているようなヒンディー語はちょっと辞書に載せるような例文ではないんですよ。綴りのミスも多いですし、意外と役に立ちませんでした。ただ、プレームチャンドの時代になかったもの、例えば人工衛星といった単語の例文を使うとしたら、ネットにも頼りましたけど。

——町田さんの辞書が出る前に、大部な『ヒンディー語＝日本語辞典』（大修館書店、2006年）が出ていますよね。

町田 古賀勝郎先生と高橋明先生の辞書ですね。やはりヒンディー語と日本語の辞書なので、一番参考になりました。ただ、方針も編纂の仕方も違うので、語義のまとめ方なんかは随分違うところがあります。

——だから双方オリジナルということなんですね。そういう大型の辞書が日本に2つもあるというのはすごいことですね。

町田 そう。世界中にそんな国はないんです。アメリカには一つもないですから。アメリカでは辞書は研究業績にならないですから、少なくとも大学人は辞書には手を付けません。それに比べるとヨーロッパでは辞書は作られていて、特にイギリスは大英帝国でインドとは当然つながりが深いし、蓄積も多くあるわけですが、現状ではヒンディー語辞典に関しては日本の方が上を行っていますから。不思議なことですね。

——1980年代から2010年代までの文字と印刷と辞書の編纂の歴史を一気に駆け抜けるような刺激的なお話をどうもありがとうございました。



インドのアラハーバード大学大学院留学時代の一コマ。中央が町田氏。現地の著名な出版人、女流詩人とともに。(町田氏提供)



アラハーバード大学で行われた故・土井久弥先生の追悼集会の一コマ。スピーチをしているのが町田氏。(同氏提供)